

郵便局は何時まであいていますか？

——言語の背景にあるもの

内田 慶市 (うちだ けいいち) 関西大学教授

「郵便局は何時まであいていますか。」を中国語で表現するとどうなるでしょうか。かなりのレベルにまで達している人ならば、次のように言うかも知れません。

“邮局开到几点？”

この文は確かに文法的には問題ありません。ただ、中国人はどうもそうは言わないようです。普通は次のように言えばよいのです。

“邮局几点关门？”

この中国語を見ますと、「なあんだ、こんな簡単な中国語」ということになるでしょう。これだったら、初級レベルでも十分に理解できる範囲だと思います。これを日本語に直訳しますと「郵便局は何時に閉まりますか。」ですが、日本語では逆にあまりそうは言わないと思います。

では、「昨日は朝の5時まで起きていた」はどうでしょうか。

この日本語をそのまま中国語に訳そうとすると先ほどの例よりも随分と厄介です。「朝の5時まで話をしていた」とか「朝の5時まで本を読んでいた」ならば、結果補語を使って「谈到五点」とか「看到五点」と言えますが、「起きていた」はなかなか適当な語彙が思い浮かびません。では、どう言うかといえば、

“昨天早晨五点(才)睡觉。”

のように言えばいいわけです。

お店で欲しいものがあるかどうかを聞く場合、日本語ではよく「～はありませんか。」と言いますが、これも中国語では「没有……吗？」よりはむしろ「有……吗？」あるいは「有没有……？」と言うのが一般的なようです。「何か質問はありませんか。」も「有什么问题吗？」となるわけです。

「あなたは誰に中国語を習っていますか。」も「你跟谁学习汉语？」でももちろんいいのですが、もっと簡単に「谁教你汉语？」と言うこともできます。

つまり、「文法的には正しくても、表現としてはそうは言わない」ということが言語にはよくあるわけです。これは、「表現法の違い」「発想の違い」、さらに言えば「文化の違い」ということに起因するものです。言語は音楽や絵画などと同じく「人間の表現」の1つですが、その背景にはその言語を使用する民族の「歴史」「思想」「文化」が潜んでいます。「ものの見方・考え方」を反映したものと言うこともできます。従って、「言語を学ぶ」「言語を習得する」ということは、単に語彙や基本文型等をマスターするだけでは不十分であり、その背景にある民族の「思惟方法」にまで踏み込んでいく必要があるということになります。最近の日本における外国語教育・学習では、これまでの「何年やっても使えない外国語」の反省の下に、発信型の外国語教育、コミュニケーション能力の向上が叫ばれますが、「異文化理解」がその中に含まれなければ別の弊害も現れてくることもまた留意すべきでありましょう。

